

創立の聖年のための
靈的歩み



第4段階

2022年11月21日-2024年2月10日

第4段階

聖年：新たにされた自覚の時

2023年9月1日-2024年2月10日

わたしたちは、主が成し遂げられた偉大なわざゆえに、
主をあがめます。
(ルカ 1,46~参照)

感謝することは、常に第1になすべきことです。(APD 1946-47,129)

あなたがたは、世にイエスの愛を生きさせるために
呼ばれたのです。(APD 1946-47, 229)

わたしたち一人ひとり、わたしたちが生活している共同体、地区、
そして修道会全体への、主の愛の具体的なしるしに感謝する：

- 共同体（地区）は、適切な方法で、感謝の思いを思い起こし、認め、分かち合う

修道会全体のために第10回総会が描いた道を、交わり、参加、シノドス的使命の中で受け入れる。

待降節と降誕節の歩みのマニフィカトの時

- 神は愛であり、その愛は無限です。わたしたちが弱く、その愛に応えられないにもかかわらず、わたしたちの修道会を導き続けてくださることへの感謝の祈り

わたしたちは、わたしたちのうちに、そしてわたしたちの修道会のうちにある神のご計画に従うために、部分教会とともに、一緒に歩んでいきたいという思いを新たにします。

深めと祈りのために役立つテキスト

カリスマテキストより

師イエズス修道女への説教

ああ、師イエズス修道女は、良心の究明を行い、自分の信心、すなわち、イエス・キリスト、道、真理、生命である聖師に従って、自分が悪いことを行ったかもしれないことについて痛悔しなければなりません。

[1.] すなわち：知性を清めること、イエス・キリストは真理なのです。彼はわたしたちの中に理性の光を灯し、洗礼によって信仰の光を灯したのです¹。ですから、わたしたちは、第1に彼に知性を捧げること、つまり、知性の聖化です。キリスト教の原則に従うだけでなく、信仰の原則に従って、全身全霊で彼を愛することです。第一に：思考の究明です。

2. イエス・キリストはわたしたちの道です。つまり、師イエズス修道女の前を歩き、「わたしの後に来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従わなければならない」（マタイ16,24）と言う道です。そして、「わたしについてきなさい」、ここでは、前を歩く、ではなく、「わたしについてきなさい」、つまり、わたしが通ったところを通り、わたしが通ったように通りなさい、という意味なのです。なぜなら、師が道であり、師は「一つの」道ではなく、「唯一の」道だからです。弟子でありながら、別の道を歩むことができるのでしょうか？師の後を追いかけないのですか！それなら、自分を「弟子」とは呼べません！

[3.] そして、イエスは、わたしたちの心の主です。彼はいのちであり、わたしたちの中の超自然的ないのちなのです。わたしたちの心は、尊敬を得たり、すべての人がわたしたちに一定の敬意を払うことを期待したりするのではなく、イエスの方を向いていなければなりません。わたしたちがもっと楽しんだり、わたしたちの気まぐれにもっと適合するような人生を見つけるためではありません。そ

¹ 師イエスのコロンチーナ参照、聖トマス・アクィナスによってなされた表現

れゆえ、教会の中で、超自然的と言えるような生活を送るのではなく、少なくとも、自分がそれを送っている、あるいは送ろうとしていると信じられるような生活、イエスの感情を心の中に持ち続けることなのです。しかし、常に心を尽くして彼、すなわち、わたしたちが何よりも愛さなければならぬイエスに向かうのです。そして、わたしたちの心はどこに行くのでしょうか？

ここに、痛悔の基となり、目的の基となる3つの究明のポイントがあります。究明は、あなたたちの信心によってなされるのです。つまり、わたしたちは、道である師イエスを敬い、真理である師イエスを敬い、いのちである師イエスを敬いたいと思うのです。そして、この条件があって初めて、そう、わたしたちは弟子と名乗ることができるのです。

ですから、**まず最初に注意すべきは、自分の思考を究明することです。**思考は、神や神のみ旨に基づくとき、聖なるものになることができます。なぜなら、もし黙想がうまくいくなら、人は神に関する考えを持っているからなのです。そして、もし、御像を作ることや、典礼の使徒職を行うことがよくできているならば、彼女は普通に、神が喜ぶこと、神の御心にかなうことについて考えます。したがって、神に関する考えであれ、神の御心に関する考えであれ、思考は聖なるものとなります。

そして、無駄な考えもあります。何の責任もない他人のことを考えることが、わたしたちにとって何の意味があるのでしょうか。自分が捨てた世界のことを考えることに、何の意味があるのでしょうか。わたしたちは物を無駄遣いしていないのでしょうか。例えば、紙幣を無駄にしたり燃やしたりすると、ほら、「愚かだ、無駄だ、罪だ」と言うのです。しかし、知性はわたしたちにとって紙幣よりも価値があるのです。悪い考えとは、神や隣人に対する信仰や希望、愛を損なう、あるいは共同生活、清貧、貞潔、従順に反する悪い考え方、また、徳、特に忍耐、そして服従、とりわけ謙虚さを損なうことです。ここに、悪い思考が存在します。

自覚のないまま罪を犯す人もいますので、その人には責任はないでしょう。それ自体は悪いことですが、おそらくその人には非がないのでしょうか。しかし、知性を守るための努力は必要です。誓願を立てた後、その誓願に反するような考えを自分に許してしまったり、誓願をめぐって計画を立てたり、後悔したりする場合、それは共同

生活に反することであり、誓願に含まれることがらに反することになります。それは、自分たちが捨てることを望んだ世界に、思考あるいは心をもって戻ることなのです。自分が宣立した誓願によって生じる義務、あるいは、修道会に対する愛や援助を望むのではなく、以前と同じように家族を愛し続け、家族というと自分の家族のメンバーを意味し、その家族に対して、人間的な方法で贈り物や援助をすることを望みます。それでは、修道女の思いではなく、敬虔な弟子である師イエズス修道女の思いでもありません。（わたしはここに一つの例を挙げます）。

従順に反する考え方がありますが、これはイエスから遠ざけるものです。「あなた方に聴き従う者は、わたしに聴き従う。あなたたちに聴き従わない者は、わたしにも聞き従わない。わたしに聴き従わない者は、天の父に反対するものである。」（ルカ 10,16 参照）神に反対することです。「わたしはあなたを心から愛しています」と 10 回でも言うことができます。ですが、これは神様に対してふざけています。なぜなら、人はすべてに越えて心を尽くして愛さないからです。本当に、魂のすべてにおいて導く方と一緒にいる人とそうでない人がいます。後者は神と一緒にいない人たちなのです。そして、聖体拝領がこのように矛盾を抱えていることもあります。舌は神とともにあります、なぜなら手を差し出しホスチアを受け取るからです。それなのに心はおごり高ぶり、イエスに逆らっています。いったい、いつ、イエスは自分に逆らう心に入らなければならぬのでしょうか？ そこで、わたしが言いたかったのは、考えを究明すること、どんな考えがわたしたちの糧になるかをよく考えることです。考え（思考）は聖なるものであることもあれば、無関心であることもあり、気が散って、自分の状態から目をそらさせるもの、悪いものもあります。

第 2：感情を究明すること。感情は謙虚さに反し、それ故に高慢になることもあれば、何かに執着し、自分自身を管理したがることもありえます。しかし、これはなんという不正でしょう。ある共同体の一員でありながら、マードレ（責任者）たちと一致しないでその共同体のものを管理することは。これは、単なる清貧の欠如ではありません。管理においてあまりに多くの自由が用いられる場合、清貧の欠如が、正義の欠如と混同されてしまいます。心は一つにならなければなりません、高慢になってはなりません。ましてや、合

法でない自由を利用するため、いやむしろ悪用するために隠れているのであればなおさらです。たとえ運営においても、最も物質的な、いわゆるビール工場であったとしても、正義に基づいてそれはできないことなのです。次に、心の感情、つまり、執着、嫉妬、あれに対して、これに対して、ああ、この妬みは、どれだけの共同体を台無しにすることか！そして、もっとうまくやって、みんなが一致を保てるために、共同体の熱心なメンバーを装いたくなるのです。おお、そして、怒りを抱き、神経質になってしまいます。わたしたちの内面が、どうであるかをよく吟味すること。また、良くない好奇心の感情、神から目をそらすような感情もありえます。感情や傾向、友人関係、独特なこと、それは基本的に欲望から始まるもので、心はまだ神の中になく、完全に神の中に確立されていないのです。ただし、誘惑と承諾を常に区別してください、わかりますね。快適さを求める傾向は、時間割に対する快適さと、人生に犠牲を望まない、つまり修道生活とは異なるものを求める快適さ、貪食という傾向もあります。だから、心の中に深く降りてください。すべてが直ちに罪になると信じてはいけません。多くは誘惑であり、不完全さであり、原罪の後にわたしたちの中で解き放たれたそれらの傾向の結果なのです。しかし、悪しき誘惑とは戦うべきものであり、多くの場合、それらは罪ではありません、ただの傾きであると非難されますが、それらを告白する義務はありません。しかし、人はそれらと戦わなければならないのです、そうです。そして、心を神に向けるのです。わたしたちは、他の何よりも心から主を愛しているのでしょうか。自己愛に支配され、その結果、人生を少しばかり歪めてしまうことはよくあることです。そして、教会の中で起こる事柄²と、外で起こる事柄とでは、人生が大きく異なってしまいうのです。あまり宗教的でない人たちの中には、仕切り壁やカーテンがあるだけで、カーテンがなかったとき、あるいは暗闇に守られていたときの行動と違うことをする人たちがいるのです。おお、その次に、言葉や仕事の究明です。このことに留まる必要はないでしょう。なぜなら、信仰の精神に反する言葉、希望に反する言葉、絶望の半ばにあること、不信感を抱く言葉を口にするとき、この究明はずっと簡単だからです。もし、希望に反し、信仰にも反

² 例、事柄、提案

するような同じ告白を常に繰り返したいと思っているならば、あるいは、自分は聖人なることは到底できない、などという思い込みがあるならば、究明は簡単です。そう。対神徳や枢要徳に反する可能性のある言葉、仮に慎重さとしましょう。ああ、慎重さに対して、わたしたちはしばしば注意を払わずに失敗してしまいます！正義に反するかもしれない言葉がありますが、個人が、真理において、正義において、清貧において守らなければならないだけでなく、修道会自体も守らなければなりません。修道会は、その行程、判断などにおいて、すべてが清貧と正義に適合していなければなりません。そして、**究明すべき行為**があります。しかし、ここでも、言葉がそうであるように、ずっと簡単に、実際、行為についての究明は、ただ一つの究明によって終わります。しかし、罪はまず知性と心、つまり、最初に内部で犯されることをわたしたちは知っています。だから、まず、内面。行為ではなく、結果ではなく、罪、つまり外面的な罪はなくとも、内面にすでにあることが何度もあるのではないのでしょうか？ですから、まず考えと感情。わたしたちは、このように、道・真理・いのちである師イエスへの信心に合わせて究明をするのです。こうしてわたしたちは、第1の信心を実践するのです³。

今日は、感謝と喜びの日です。感謝は、わたしたちの不足にもかかわらず、主がお望みになったことを成し遂げてくださったからです。聖ピオ10世⁴は、信者が聖体に向かうように望まれ、そしてその思いを司祭に結び付けていくよう望まれました。つまり、聖体と司祭とを一致させられたのです、なぜなら、聖体を聖別し、それを配らなければならぬのは司祭だからです。そして、それ以来、主は師イエズス修道女会の誕生を準備し続けられました。そして、最初に踏み出した一歩も、最初から繰り広げられたすべての出来事も、すべては主であるイエスによって導かれ、支えられ、成し遂げられたのです。

したがって今日、40周年を記念することは良いことです。一方、わたしたちは絶えず感謝を捧げなければなりません。だから、この日は、主への感謝を示すために、良い**テ・デウム**を捧げましょう。感

³ APD 1958, 147-151.

⁴ 聖ピオ10世 1903年8月4日～1914年8月20日在位

謝、その感謝は言葉だけではなく、行いの感謝なのです。一方では、一人ひとりに関わる事、そして修道会全体に関わる事です…。聖体を中心とした親密な結びつきがあるのです。なぜなら、この一致は聖体によって生まれ、わたしたちは皆、イエス・キリストご自身である唯一のパンによって養われるからです。一致すること。分裂は自己愛から来ます。その自己愛は神の愛の敵であり、自分自身の聖化の敵です。…生きるべきは会憲の書だけであり、従順における温順さと生活における愛徳を全員が共に生きることです。つまり、**一致に導く要素はまさにこれら、従順と相互愛**が、日常生活における二つの実践的な基礎なのです。

修道会が徐々に成熟していく過程では、労苦が伴いました。そして、修道会の変遷は、少しずつ、一人の人間、つまり、生まれた赤ん坊、成長する子供、そして、大きくなった子供、少年、青年、そして、一人前の年齢の人間としての人生と同じです。すべての修道会がそうです。修道会は人ですから、修道生活は、子供が生まれて成長する生活に準ずるのです。

おお、修道会の紆余曲折はすべて、修道会への神の好意と愛の証明であり、それゆえにわたしたちは感謝するのです。その一方で、修道会は人と働きにおいて成長しました。そして、あなたたちはそれを確めることができるし、また、すでに確かめました。あなたたちは何カ国に到達したのでしょうか？ どれだけのイニシアチブがあるのでしょうか？ 特に、修道会のメンバーは何人いますか？ そして、今日、最終承認を受けた修道会が、善意に満ち、修道会が教会における神の計画に従ってその使命を果たすならば、人々、誓願者を完徳に導くことができるのです。

今日、この意向を持つこと：主が、その慈しみによって、礼拝を通して、主がわたしたちにこの恵みを与えてくださること、すなわち：

- 修道会に所属する魂（人々）が聖化されること
- そして、使徒職がますます発展していくように

修道会は聖化のためのすべての手段を持っており、会憲は使徒職のための善良で確実な道を示しています。従って、導きは明確であり、道はただ一つです。それは確かに高速道路でしょう。しかし、上る高速道路であり、下るものでも、平坦なものでもなく、上へ上へと

進むものであり、人の数と、人の熱意と、使徒職の完成度などにおいて、進むものなのです。そうすれば、あなたがたは教会に、神の計画、聖師イエスの計画による貢献をするでしょう。あなたの心を広げなさい、「あなたがたは皆、わたしのもとに来なさい」（マタイ 11,28）というイエスの心に似た心を。敬虔な弟子、師イエズス修道女は、イエスに似たものでなければなりません。

- **思考**において: それは福音的なもの

- **望み**において: またこれも福音的なもの。実際には、会憲のすべての条文に影響を与えた福音書。したがって、イエスの意志と（わたしたちの）意志の結合が必要です。

- イエスの心に似た**心**を求めてください...

結論: 今日は聖なる喜びと聖なる意向、そして同時に、主への表明です。召命を存分に生きること、存分に生きること。最初に読むべきは福音書、2番目に読むべきは会憲。それが確かな道であることに疑いの余地はありません。...それゆえ、今日というこの日に信頼しなさい。そして、主が与えてくださった愛と慈しみの証しが、未来への信頼を確信させ、確固たるものにします。しかし、常に謙遜と信仰、信仰と謙遜、謙遜と信仰、この2つのステップを共に歩みながら。常に前進すること⁵。

師イエズス修道女の信心の中心とは何ですか、師イエズス修道女の行いのあり方、彼女の修道生活のあり方、また、使徒職のあり方とは何ですか。わたしたちは完全に神である師イエスのものでなければなりませんから、ある部分だけ、すなわち典礼だけ、司祭職の奉仕だけ、聖体の使徒職だけに留まらず、使徒職だけを考えるのではなく、まず、本質である聖化というものを考えなければならないのです。この聖化は、常に2つの要素で構成されています。第一は、放棄、または自己否定、自己に死ぬこと、離脱、罪の悔い改め、欠点との闘い、あるいは古い人間性の死など、それが何と呼ばれようとも。第二は、キリストにあるわたしたちの人格を確立すること、つまり、知性において、意志において、心においてイエス・キリストを生きることです⁶。

⁵ APD 1964,47-56.

⁶ APD 1957, 184.

...このような美しい召命を与えてくださった主に感謝し、観想生活と活動生活に共に参加することで、まさに師イエスのいのちとなるのです。このようにして、あなた方は完全な意味で、師イエズス修道女となるのです。活動的な生活だけをするのと、観想的な生活だけをすることは別物でしょう。両方とも、本当に師イエスに似たものとなるためには、両方を生きなければならないのです⁷...

聖体の使徒職は、すべての師イエズス修道女にとって必要であり、これは、祈りの活動、司祭職への奉仕活動、典礼への奉仕活動のいずれであっても、彼女らのすべての活動の源、根を構成するものなのです。出典：*Haurietis aquas in gaudio de fontibus Salvatoris* 「あなたたちは喜びのうちに救いの泉から水を汲む」（イザヤ 12,3）。魂の渇きを癒すのに役立つ救いの水、神である主はこの救いの水を飲むようにすべての人を招いたからです。田園に広がる水は生命をもたらし、その水によって植物は成長し、実を結ぶのです。

第二に、司祭職奉仕の使徒職は、その重要性という点では、教会の奉仕者、「キリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者」（1 コリ 4,1 参照）を通して教会になされる貢献であり、そのため、司祭が行う業の実りを共有すること、洗礼、堅信、罪の赦し、感謝の祭儀、病者の塗油など、司祭が行う秘跡に参加することになります。すべての特別なミサに参加することなのです。参加すること。（司祭の）教えるという役務全体、教会を治め、魂を導くという役務全体への参加だということです。確かに、誰も他の姉妹をうらやましがらるべきではありませんが、もしうらやましく思うことがあるとしたら、霊的な実りや特定の功績のために司祭職に身を捧げる人々であることをうらやましがりましょう。なぜなら、彼女たちはマリアが行ったその務めにまさに参加し、それによって彼女たちは司祭として、いけにえとして、師イエズス修道女として御子の行為全体を分かち合う者となるからです。

第三に、教会が完全で超自然的な共同体で、特に教会がイエス・キリストの神秘体である限りにおいて、教会への奉仕である典礼の使徒職があります。典礼奉仕、それは何ですか？ 典礼奉仕とは、修道女が信心礼拝に協力をすることです。修道女が神聖な礼拝

⁷ APD 1957, 214.

に協力することです。聖なる礼拝とは、秘跡、ミサ、そして教会で行われるイエス・キリスト、至聖なる三位一体、聖体、聖霊、聖母、聖人を称えるすべての儀式を指します。貢献、奉仕、それはわたしたちが決して先行することなく、従うことであり、常にわたしたちが修道会の「奉仕者」であり、教会の奉仕者、魂の奉仕者であることを忘れてはならないからです。奉仕することです。そして、自分を奉仕の場に置かない者は、自分をその恵みの秩序の外に置いてしまうのです。それはまるで、雨が降ると中の植物がよみがえるはずの乾いた鉢を、雨の中に置く必要があるのに、雨から除けておくようなものです。自分を押し付けるためではなく、仕えるために来たイエス（マタイ 20,28 参照）に寄り添い、常に仕えること。つまり、教会に仕えることです。仕えること。この言葉は悪く理解されているかもしれませんが。むしろ、「仕える」という言葉ほど誤解されている言葉を他に見つけるのは容易ではないかもしれません。しかし、神の霊を持つ人、真に聖師イエスのものである人は、この言葉をよく理解しているのです。もし、わたしたちが仕えなければ、栄光を得ることはできません。なぜなら、人が自らを低くするのと同じだけ、地上では恵みのうちにあり、そして天国では栄光へと、その人は引き上げられるからです。教会への奉仕について、その条件を見てみましょう。

第一の条件、根本的な条件は、教会に仕えるにあたって、教会が何をするのかを念頭に置き、柔和に、奉仕的に教会に協力することです。そして、教会は信仰の教師であり、聖性の教師、救いの恵み、魂への恵みの分配者、聖化するものなのです。

つまり、こうです。典礼奉仕は、まず第一に、教会が真理の教師であり、教会が教える職責を持つことから、教会は教師であり、わたしたちは弟子、「弟子」と呼ばれる教会の一部、学ぶ弟子なのです。学ぶ者である教会の一部なのです。そうして、教える教会にますます参与して行くことが学ぶことなのです。（『キリストと教会におけるいのち』誌があります。）典礼のこと、典礼の説明……ああ、イタリアではある国々と比較してまだ遅れていることもあります。他の国々より進んでいるところもあります。教え導く教会です。つまり、使徒職のあらゆる部分が、多かれ少なかれ、教会の教えの働きに直接貢献しなければならないのです。さて、どうでしょう？ 図案、刺繍、画像、さまざまな包装、そしてまた、センターのあるさ

まざまな都市での本の展示においても、教義に反するようなものは決してありません。異端であるもののイメージは成り立ちません。この点に関して、最初にコスタンティーン枢機卿⁸が、そして後に教皇庁が、どれだけのことを書いたかご存知でしょう。そこには目的があります。醜いもの、奇妙な十字架、マドンナではないマドンナ、少なくとも女性ではないマリア、それから秘密結社フリーメーソンの目的は、教会とその教義を馬鹿げたものにするにあると、当時は言われていました。...そして、講演の中で、コスタンティーン枢機卿はこのことをよく説明しています。それに、これはわたしたちがいつも言っていることで、あなた方の魂に確実に浸透していることです。そして、あなた方はこの確信を共有し、この説得力を有しているのです。教える教会の奉仕。純粋な教義。すべてのものは、知恵をもって映像化することができます。すべてのものは、それが物質的な部分を持っているならばそのまま、または、それが物質的にそのままでは表現できないほど高尚なものであるならば、象徴（シンボル）において描けるものとして映像化することができます...

第二に、統治する教会、すなわち、魂を導く教会、独自の特別な統治を持つ教会に貢献すること... 魂を導くこと、聖なるものへと導くことです。その結果、この務めに参与すること... 聖画像、絵画、彫刻、アルテサクラ、刺繍、そして縫製部にある司祭の服でさえ、道徳、善意、禁欲主義、聖なる生活、教皇によって解釈・提案された福音を実践するよう促さなければなりません。すべての美德がここにあります。すべての社会的善と国際的善、多くのシスター、多くの宣教師、多くの修道会のすべての使徒的活動がここにあります。ああ、なんという広大な分野でしょう！そこには驚くべき分野があるのです！統治している教会において全うされなければならないこととして、使徒職をよく理解することです。イエスは単に「行って教えなさい」と言われただけでなく、「わたしが話したことを実行しなさい」（マタイ 28,20 参照）とも言われたからであり、これが使徒職の第二の点なのです。

教会に協力する第三のポイントは、魂を聖化するという教会の使命、贖いの賜物、恵みを分配するという教会の使命において、教会に同

⁸ G. コスタンティーン、枢機卿 (1876-1958) 雑誌『キリスト教芸術』の創設者

伴し、教会に仕えることです... そして、あなたたちがしてきた多くのことを、あなたたちがもっと行うのです。教会への参加と協力、奉仕。そして、それは美しくなければなりません、できる限り美しく、常に真の典礼的なセンスで... 要するに、使徒職は教会が持っている聖化する働きを示さなければならないのです。建築、絵画、詩、音楽、そして、あなた方が持っているすべての様々な活動、イニシアチブは、魂を神との一致に導くことに向けられているのです。神との結びつきは救いを意味しますから、それは神の子であることを意味し、つまり、神の子であるならば、神の相続人（ローマ 8,17）、つまり天国のことを意味します。教会、祭壇の美しい形、メダイ、彫像、絵画、聖画像など、それらがどれほど魂を惹きつけるのに役立ち、教会が与えてくれる恵みの宝庫を示すことができることか。使徒職の精神に入り、教会に奉仕し、個人的にも集団的にも真理の教師、魂の導き手として、また聖化する者、恵みの分配者として、教会の使命に協力すること。常に祈ること。教会への奉仕と教会の活動への謙虚な協力というこれらの意向は、すべての交わりにおいて、常に求めるべき恵みとなります。「Fac ut videam 見えるようにしてください」（ルカ 18,41）。わたしたちがいつも道をよく見ることができるようになります。"え、でも、すでにこの美しい絵を、この美しい画像を作ることに成功していますよ！"と言うでしょう。では、わたしはあなたたちに何と何を言うべきか？ 前進しなさい！...もし、あなたがたが、何歩か踏み出したのなら、もっと前進します、さらに、いつも前進するのです。しかし、それには謙虚さが必要です。...教会の謙虚な協力者であること。生き働くメンバーとして「キリストと教会において」働くのです⁹。

霊的・超自然的な意味での使徒職を考えること。 聖体の使徒職はどのように果たされるのでしょうか？ どう理解されているのでしょうか？ 礼拝の時間の中でそれがどのように実践されているのでしょうか？ そして、司祭職奉仕の使徒職、それはどのように理解され、どのように果たされているのでしょうか？ 聖体の使徒職と司祭職奉仕の使徒職、さらに教会への奉仕、すなわち典礼の使徒職のどれも果たすために、どのように信仰を導き、鼓舞し、奮い立たせ

⁹ APD 1957,330-335.

るのでしょうか？あなたたちに、どのような特典があるのでしょうか！持っている恵みを大切にしていますか？

聖体の使徒職、もしそれが、わたしたちが自分たちのために礼拝に費やす時間としてだけ考えられるなら、それはそれで素晴らしいことです。しかし、それは使徒職であり、**全世界のための奉仕**でなければなりません。**司祭職の使徒職**はどのようになされるのでしょうか？どんなことをしますか？屈辱的なことですか？しかし、それがイエスに対する**聖母の務め**であるならば！また、**教会への奉仕**、つまり**典礼の使徒職**はどのように行うのでしょうか？芸術だけでなく、利益だけでもない。そうならなければならないのです。なぜなら、自分が奉仕する祭壇によって生きていかなければならないのですから。しかし、仕事の内には魂があるのです。信仰の精神があるとき、内なる魂があります。なぜそれを行なうのですか？何の目的で行なうのですか？何の役にたつのですか？超自然的な精神です。この精神を失えば、人は労働者になってしまいます。それではダメです！しかし、それが（超自然的な）精神で行われるとき、**[そこには]真の典礼使徒職**があり、それがよく浸透しているなら...もしわたしたちに信仰があったならば！そうです、わたしたちは揺り動かされるでしょう。そして魂とわたしたちの中にあるすべての力は、イエスへの奉仕のためにあります。そうすれば、すべてが天の父に方向づけられるのです。

...天の父の精神性、師イエズス修道女の精神性、わたしたちの中で働いておられるイエスの精神性を主に求めること、そして、十分にイエスに耳を傾けず、イエスが生きていない、つまり（イエスを）働かせていない苦しみを知ることです。「わたしの内にキリストが生きておられる」。つまり（もし）、わたしたちの中にこの超自然的ないのち、超自然的な組織体があるならば、イエスはわたしたちの中に生き、わたしたちの本性的上に生き、そして、新しい人、新しい人格、キリストの中にいる人となるのです。ですから、わたしたちは主に求めなければならないことがたくさんあります。イエスの精神性、御子の精神性によって知られる御父の精神性です。「わたしを見る者は、父を見る」とイエスは言われます。もし、わたしたちが福音をよく理解しているなら、御父の精神性を理解できるでしょう。なぜなら、イエスはまさに御父の精神性をわたしたちに示すために来られたからです。「*Haec est vita aeterna ut cognoscant te...*

et quem misisti Iesum Christum. イエス・キリストを送られたあなたを知ること、そこに永遠のいのちがある」。そして、これこそが聖化のいのち、永遠のいのちなのです。知性の聖化を求めることは、御父の知性であるイエス・キリストの知性を求めることだからです¹⁰。

御父への愛。そして、そこにあなたたちの聖体の使徒職、司祭職への奉仕があるのです。イエス・キリストのうちに生きている以上、神に栄光を帰し、また魂に善いものをもたらし、霊的な助けをもたらす限りにおいて、それは使徒職なのです。使徒職です。師イエズス修道女の生き方は、観想的な生き方であり、同時に、活動的な生き方でもあります。しかし、観想的な生活、すなわち祈りが活動的な生活、すなわち使徒職と結びついたとき、その活動的な生活はより優れたものとなります。

時には、「しかし、より完璧になるために、わたしは観想生活のためにこれを捨てる」という誘惑が、他の誰かから来るかもしれませんが。つまり、精神生活が後退してしまうのです。あなたは2つのものを持っていたのに、今は1つしかない、つまり観想生活だけになってしまうのです。ああ、その代わりに、観想生活が活動生活と一体となったなら、見なさい、完全なものです。これこそ、より偉大な聖化の生活であり、あなたたちはそこにいます。窓から右や左で起こっていることを見ないで、聖櫃を見つめなさい。このイエスは、聖体の使徒職、典礼、司祭職の奉仕において、ご自身のために、そして魂（人々）のために、あなたたちを引き受けてくださったのです。あなたと修道会の中にある恵みの神秘。ああ、では、使徒職をどう考えますか？使徒職は導き出されたものです。天の父を愛する者は、その子供たちを愛します。そして、すべての人は神の子である。もし彼らが今も、洗礼を受け、恵みの中で生きているならば、受肉した神の子のメンバーとして、彼らはイエス・キリストにおける神の子であり、したがって、より崇高な、より高い地位にあるのです¹¹。

¹⁰ APD 1963,106-108.

¹¹ APD 1963, 122.

パウロ家族の全体、その個々の部分、そして世界における使命は、まだ理解されていません。それを望まれたのは神です。そして、あなたたちの奉獻は特別な奉獻なのです、そうです。自分がパウロ家族の一員であると感じ、完成されたものであると感じることで、ですから、できる限りの協働をします。あなたたちは、祈りと司祭職奉仕と聖体の使徒職の協働の部分、つまり、特別な部分での協働をします。特別な部分は非常にデリケートで、他の部分にも影響を与えるので、より沈黙を守る必要があります。わたしは、その必要性があるように思います。ある人はセンターで、ある人はパウロ家族と、ある人は生活や、社会、教会で必要な様々な関係を持っていることを考えると、沈黙はもう少し想起されるべきかと思われまふ。第一級と考えられる沈黙もあれば、第二級となる沈黙もあるでしょう。しかし、いずれにせよ、イエス・キリストとの一致によって恵みを引き出す、つまり、イエスであるシケルの井戸から汲み上げるのです（永遠の命へと湧き出る水の泉）。目に見えませんが、現実に生きている、働いている、すべての人がそこから飲むことができるように、あなたたちはそこから水を汲まなくてはなりません。イエス・キリストとの親密な一致、イエスとの豊かな会話、イエスが10、15、20、25、30歳の時に、マリアがナザレでイエスと交わした会話を手本に。マリアは、これらの言葉をすべて心に留めていました。今日、あなたたちのすることに、あらゆる祝福がありますように。そして、もし、自分が本来の正しい位置にあると考えられるなら、あなたたちはますます幸せな人生を送ることができるようになるでしょう¹²。

わたしたちはマリアを "先生" と呼んでいます。使徒職の先生、つまり、聖体の使徒職、司祭職の奉仕の使徒職、典礼の使徒職という三重の使徒職の教師です。マリアは先生、そうです。わたしたちは、使徒職とは何か、カトリックの使徒職、キリスト教の使徒職、修道者の使徒職の本質とは何かをよく理解しなければなりません。その本質とは何でしょうか？それは、自分が持っているものを他の人に与えることです。持っていない人は与えることができません。つまり、魂が神で満たされており、神について語る必要性を感じ、神、

¹² APD 1963,168.

イエス・キリスト、教会、秘跡を知らせる必要性を感じていることです。

使徒職を例えるなら、洗面器、これは最も理解しやすい概念ですが、つまり、ある時点で浴槽が満杯になり過ぎて、満杯になったものを汲み出すもの、つまり、「洗面器」です。恵みの水で満たされた魂は、ある時点で、満ちあふれるものを外に注ぎ出します。「満ち溢れる」ものを、わたしたちはイエス・キリストから（ヨハネ 1,16 参照）、マリアから受け取っています。そして、人々は、使徒から、充滿したものを受けなければなりません。マリアは、神がご自分とともにおられた、受肉した神の子をこの世にお与えになりました。そうです、彼女は自分が持っていたものを与えたのです。魂（人）は空っぽのとき、与えることはできません。ある時点で魂が空になれば、使徒職は失われ、たとえ仕事をしたとしても、その仕事にはもはや精神はないのです。しかし、もし使徒がいて、使徒の中に神がおられるなら、その使徒は自分が持っているものを捧げます。もしイエス・キリストを持っているなら、その人は自分の持っているものを捧げるのです。時に、魂のない記事と精神に満ちた記事があります。なぜなら、それらは恵みと賞賛に満ちた魂から発するものであり、イエス・キリストへの信仰、教会そのもの、すなわち秘跡や典礼に満ちた魂から出ているからです。

洗面器や浴槽が壊れて水漏れするのはどんなときですか？魂がその精神を失い、世俗の精神が少し入り込むとき、教会で役に立たなくなれば、人は役に立たなくなり、魂は実を結ばなくなります。しかし、魂（人々）は、わたしたちから使徒職を受け取る権利があります。なぜですか？ 社会において、人類家族において、すべての人誰もが貢献しなければならないからです¹³。

あなたたちの使徒職、聖体礼拝とは、礼拝を通して、教会へと導くこと、最初にパウロ家族に、そして教会へ、そして、全人類へ、イエス・キリストの光、イエス・キリストの贖いへと導くこと、すべての人が、受難と死の実り、イエスの説教の実り、彼の生涯の聖性の実りを受けることができるまでに。そうです。人類に、つまり全人類に、すべての人々に、次のことを実現してくださるよう主に願

¹³ APD 1963,179.

いなさい。900 万の聖櫃と司祭が必要です。礼拝において、地図か世界地図、あるいは国名が書かれた紙、あるいは大陸だけでも書かれたものを考えてみましょう。イエスの心ですべての人を理解すること。偉大な使徒職！内的生活の使徒職がありますが、そのすぐ後に、祈りの使徒職と苦しみの使徒職があります。すなわち、内的生活の使徒職です。自らを聖化しようとする人は、たとえ修道院に閉じこもって、頑丈な鉄格子でドアや窓を塞いでいても、常に使徒職を行っていますし、魂の聖化によって**キリストの良い香り**（2 コリ 2,15）が広がるのと同じように、その影響力、聖なる魂の影響力は広範囲に広がります。祈り、祈りの使徒職は常に「イエスのみ心よ」（奉獻の祈り）と、イエスが持つておられる意向を唱えます。

師イエズス修道女とは、イエスの心、イエスの願い、すなわち、要約すれば、御父への栄光と人々への平和、人々の救いを望むイエスに一致する者なのです。

司祭職への奉仕の使徒職について。イエス・キリストの後に、奉仕者がいます。その奉仕者の中で、彼は生き、かつ、働いておられます。なぜなら、聖体、ひいては聖体のパン、ひいてはイエスの現存を生み出すのは彼だからです。犠牲、聖体拝領、礼拝という 3 つの側面のもとで、すなわち、聖櫃の中におられるイエスの現実的で継続的な現存において、常に聖体のイエスとみなされること。...教会が十分な人数を確保できるように祈りなさい。何人必要ですか？**300 万人の司祭が必要です。**それなのに、修道司祭は 14 万人、教区司祭は約 260 万人しかいません。...そして信徒の修道者もいます。そして、修道者聖省の発言によれば、170 万人の修道女がいます。これらの数を思い出し、イエスに申し上げなければなりません。...そして、司祭職への奉仕という使徒職に献身する人は、この使徒職をこれまで以上に喜んで全うするようにしましょう。なぜですか？教会は多くの司祭と神に奉獻された多くの魂を必要としているからです。今、人類は成長していますが、（司祭の）数はこれまであまり増えていません、ずっと増えていません..... 福音と教会と救いを宣べ伝える司祭が必要とされているのです。

そして、教会への典礼奉仕です。つまり、司祭は祭服、祭壇、教会、告解室、そして礼拝につながるもの、礼拝に供するものすべてを必要としているので、ここに典礼の使徒職があるのです。わたしたちが一般的な意味で典礼と言うのは、一方に、その中心であるミサの

ような厳密に典礼的なものがあり、次に、もはや秘跡ではなく、秘跡的なもの（準秘跡）と呼ばれるものがあり、さらに、十字架、ロザリオ、ご像、絵画、レコードなど、人を神に引き合わせるためのあらゆる手段があります。マリアの保護の下に、ごらんなさい、中心は、マリアがイエス・キリストを世にお与えになったようになるのです。なぜなら、すべての使徒職はキリストに集約されているからです。そして、キリストを世に与えたのはマリアなのです。それが神の御心だったので¹⁴。

『生活の規範』より

24.

わたしたちは師イエスに従うために、公に宣立する貞潔、清貧、従順の誓願を通して、わたしたちの存在すべてを神にささげる。

創立者とマードレ・スコラスチカが歩んだ足跡に従い、使徒パウロのように、完全にキリストと同じ姿になるまで、聖霊によって形づくられるままに自身を委ねる。

66.

神とわたしたち相互の真の関わりをもたらず貴重なたまものとして、沈黙を大切にする。聴くという姿勢によってわたしたちは、主と隣人をもてなし、真のコミュニケーションを学ぶ。

潜心のうちに物事を明確にし、清め、本質的なことに集中する力を汲み取る。このように生きられた沈黙は、わたしたちを内的いのちの充満へと導き、使徒的效果を生む源となる。

71.

召命の歴史の中で、神は、家族である修道会の権利と義務を伴う一員となるように、わたしたちを呼び、強くまたやさしく働かれた。

¹⁴ APD 1963,180-182.

神がわたしたちと交わされた契約に、わたしたちは忠実であるよう、また、受けたたまものを共通の善のために活用するよう力を尽くす。姉妹の側近く、特に困難な時期にある姉妹に同伴する。

永遠に忠実である主への信頼を新たにしながら、確信と愛をもって互いに勇気づけ合う。わたしたちは、試練の時にも揺らぐことなく、祈りにおいて堅忍し、希望のうちに喜びに溢れて歩む。

奉獻生活の価値に対する信仰が衰えないよう、そして、「聖人たちが受け継いだ栄光に満ちた宝」を理解できるよう神に願う。

132.

わたしたちは、愛する御子を聖別し世に送られた方、そして、聖霊によってわたしたちをも聖別し派遣してくださる御父に栄光をささげる。旅する教会、宣教する教会は、師であり主であるイエスの福音を証しし、告げ知らせる任務をわたしたちに委ねる。

過越の神秘の体験は、押し留めることができない愛の炎をわたしたちの心に燃え立たせる。この炎は愛するために心を熱くし、照らし、温め、燃え上がらせる。

133.

教会におけるわたしたちの使命は、聖体の中に、司祭職の中に、典礼の中に生きておられるイエスへの愛という、ただ一つの源から湧き出て、ただ一つの目的に向かう。

師イエスに照らされ、導かれ、養われて、この世界に神が現存されることを証しするために、使徒的な愛の創造性を多様に表現していく。

136.

わたしたちの使命の表現である使徒の女王マリアと復活の主を最初に証しした女性たちのように、パウロ家族と教会の中で、師イエスに従い、奉仕する。

この福音の女性たちの精神をもって、「すべてのものがいのちを、しかも豊かないのちを得るために」人々と被造物の再生のために協力する。

恵みの記念のために重要な日

1948年9月14日： マードレ・スコラスチカは、修練長の務めをもって、ジェノヴァからアルゼンチンに向けて乗船し、**10月2日**アルゼンチンに到着

1989年10月22日: ティモテオ・ジャッカルド師が福者に挙げられる

1936年10月27日: マードレ・スコラスチカ、終生誓願を宣立する¹⁵

10月29日: 聖師イエスの祭日¹⁶

1923年11月21日: オルソラ・リバータとメティルデ・ジェルロットが、パウロ家族における新しいわざを始めるために、別にされる

1971年11月26日: わたしたちの創立者、福者ヤコブ・アルベリオーネ師がローマで帰天

1936年11月29日: マードレ・スコラスチカは、エジプトに共同体を創立するために、Sr. M. エリア・フェレーロとともにナポリ港から出航し、12月2日にエジプトのアレキサンドリアに到着

2013年12月9日: 教皇フランシスコは、神のはしためマードレ・スコラスチカ・リバータの英雄的徳を認め、尊者とする教令を發布

1924年2月10日: 師イエズス修道女会創立記念日

¹⁵ 『大樹の起源を見る』 p.92 (ページ数はイタリア語原本のもの)

¹⁶ APD 1957, 85 “わたしたちは師イエスを見つめなければなりません”; 118 “あなたたちは聖師に属する者です”.

**CONGREGAZIONE DELLE
PIE DISCEPOLE DEL DIVIN MAESTRO**
Casa Generalizia – Via Gabriele Rossetti, 17 – 00152 – Roma

<http://pddm.org>